

第 21 回ピースポート「旅と平和」エッセイ大賞 次点作品

忘却の、手前で／若林仁菜さん(20歳)

2024年11月。私が米国ミネソタ州に留学して僅か2ヶ月後、この国は巨大な地殻変動のような政治的転換点を迎えた。ミネソタの冬は厳しく、マイナス20度を下回る空気が肺の奥まで入り込む。しかし、私を真に震え上がらせたのは、物理的な寒さではなく、社会を覆う目に見えない「境界線」の気配だった。ある凍てつく朝、自宅の目と鼻の先で、乾いた破碎音が響いた。車の窓ガラスが乱暴に叩き割られ、警察とICE(移民・関税執行局)の冷徹な叫び声が静寂を切り裂く。ハンドルにしがみついた親子の手が引き剥がされ、凍った路面へと引き摺り出され、拘束される。砕け散ったガラスの破片だけが、冬の朝日に残酷に反射していた。私が暮らしていた留学生達のシェアハウスからは、活気が消え、不当な拘束を恐れて外出を控える日々が始まった。

日本で育ちながらアメリカのパスポートを持つ私は、この凄惨な光景を留学生や移民の友人達と見つめつつも、その境界線の「安全な側」に守られている。このパスポートという紙切れ一枚が、ある者には生存の権利を与え、ある者からは命、家族、生活を奪い去る。この恣意的で暴力的な特権の重みに、私は目眩を覚えた。ここで、私は一つの問いに突き当たる。私が享受してきた「平和」とは、権力によって「平和のようなもの」を与えられた人々だけが得られる忘却という名の贅沢に過ぎないのではないか。誰かの安寧が隣人の排除の上に設計されているとき、構造的暴力がある時、私達はそれを平和と呼び続けることが出来るのか。この問いに応えるべく、旅に出た。

2025年7月。私はウィスコンシン州の深い森に抱かれた街、ヴィロクアで一夏を過ごした。そこは、近代文明を拒絶し数世紀前の生活を守るアーミッシュと、カウンターカルチャーの精神を受け継ぐヒッピーが共生する境界の地だった。どちらのコミュニティも、暴力に溢れる「外側」の社会から身を切り離し、独自の平和を追求しているように見えた。しかし、その静謐な緑の中に身を浸すほどに、私はそこにある平和の残酷な側面を無視出来なくなっていく。

アーミッシュの信仰は「マタイによる福音書」に基づいており、「赦し」を至高の徳目とする。2006年に起きた凄惨な学校銃撃事件の際、彼らが犯人を糾弾するのではなく、即座にその家族を赦したエピソードは、平和の鍵となる非暴力の象徴として賞賛された。しかし、アーミッシュの農場や家庭を訪れる中で見えてきたのは、その「赦し」がコ

コミュニティ内部の暴力を隠蔽する装置として機能している現実だった。性被害に遭った女性たちは、信仰の名の下に加害者を即座に赦すことを強要される。そこでの赦さないという選択は、平和を乱す不信の罪とされるのだ。コミュニティの「平和」が、弱者の沈黙によって保たれている構造的暴力の姿を見ることになった。

一方で、ヴィロクアの森に点在するヒッピー・コミュニティが掲げる「平和」もまた、別の危うさを孕んでいた。彼らは資本主義の搾取システムから物理的に脱却し、オフ・グリッドな生活を送ることで、国家による戦争や企業による環境破壊に加担しない「平和」を生きると自負する。しかし、現代社会における生活は毛細血管のように暴力溢れる構造と繋がっている。安価な製品、便利なエネルギー、デジタルインフラ。その恩恵を部分的に享受しながら、物理的に距離を置いて共犯性を否定することは、構造的暴力を不可視化する装置になり得るのではないかと考えた。

私の問いは、アラスカ州の小さな港町、シトカへと行き着いた。雨に濡れたロシア正教会の古い聖堂で、一人のトリンギット族の高齢女性に出会った。彼女はかつて、日本企業「アラスカ・パルプ(ALP)」の工場で働いていた。そこは彼女の先祖が守り続けてきた森を破壊する最前線だった。1959年から1993年まで続いた日本企業による資源搾取。愛する森を自らの手で切り倒すという逃げ場のない労働構造の中で、多くの先住民族の人々がアルコールやドラッグの依存へと沈んでいった。彼女の語りを聞きながら、私は衝撃を覚えた。私の家族は、日本の経済成長を牽引してきた通商産業省(現・経済産業省)と関わりが深い。シトカの森を破壊したALPの背後には、戦後日本の復興という巨大なナラティブがある。家族の歩みと、その結果として魂を削られた彼女の人生が、いま、教会のベンチで交差している。日本の豊かさは、遠く離れたアラスカの先住民の精神的苦痛という犠牲の上に築かれたものではなかったか。

アメリカでの旅を経て確信したのは、平和とは清廉さや無垢さを追求することではなく、自らの「共犯性(Complicity)」を認め、受け入れることから始まるのではないか、ということだ。

ヴィロクアの森で出会ったアーミッシュやヒッピーのコミュニティは、現代社会の歪みから切り離すことで、自らの純粋性を守ろうとしていた。また、日本企業のアラスカ・パルプ(ALP)が、戦後日本の経済成長というナラティブの裏側で、トリンギットの人々の土地と精神を搾取した歴史も、多くの日本人にとっては自分とは無関係な遠い地の出来事として切り離されている。しかし、私達はどうしても繋がっている。私が「平和」を享受しているとすれば、それはその過程で生じる汚れや痛みを、構造的な弱者へ

と常に押し付け、不可視化しているからに他ならない。自分の視界から暴力を排除し、別の場所へ外注することで得られる平穏を、私達は疑わなければならない。社会制度はそれを見えなくするように精巧に設計されており、特権を享受する側にとって不快な事実だからこそ、それを忘却の彼方へ追いやるのは容易い。しかし、真の平和を志すならば、私たちはこの逃れられない繋がりを直視し、その汚濁の中でいかに倫理的に振る舞い続けるかを、一人の人間としての誠実さを持って問い続けなければならないと考えるに至った。

この逃れられない「共犯性」を直視したとき、真に倫理的な振る舞いとは、特権という安全地帯がもたらす無関心を自覚的に剥ぎ取り、具体的な「連帯」へと足を踏み出すことに他ならない。私たちが志すべき連帯とは、単なる抽象的な理想ではなく、一人ひとりが今いる場所で最善を尽くすという、極めて地道な行動の積み重ねである。私たちは誰もが、この社会の暴力的な構造と無縁ではいられない。しかし、だからこそ、構造的に不可視化された他者の苦痛を自らの痛みとして引き受け直し、それを個人的な悲劇に留めず、共同の歩みへと繋げていく責任がある。

ミネソタの凍てつく冬、ICE(移民・関税執行局)の不当な拘束に怯える隣人達のために、私は地域の相互扶助ネットワークを構築し、SNSやビラを通じて安全な場所の情報をリアルタイムで発信した。また、大学のダイニングホールで廃棄されるはずの余剰食品を、法的に不安定な立場にある移民コミュニティの玄関先まで届ける草の根の供給ラインの運営に携わった。

また、沖縄の若者やアイヌのルーツを持つ学生たちを繋ぐフィールドスクールを企画・運営した。既存の教科書が語る影で削ぎ落とされてきた土地の記憶——軍用地として接収された生活の跡地や、消えゆく母語で語られる生活史——を自らの足で歩き、当事者の声に直接耳を傾けた。対話の場を整えるファシリテーターとして、マジョリティのナラティブによって沈黙を強いられてきた彼らが自らの言葉で歴史を再定義し、語る主体性を回復させていくプロセスに伴走した。

私が今回ピースボートを志望するのは、これまで各地で分析してきた「構造的暴力」を、自分自身の身体を通じて「地球規模の連続体」として捉え直したいからである。私はこれまで、ミネソタ、アラスカ、ウィスコンシンといった点の場所で、暴力と抵抗の断片を見てきた。しかし、ピースボートという「動くコミュニティ」は、それらの点をつなぎ、世界が物理的に繋がっていることを教えてくれる。船という逃げ場のない閉鎖空間で、国籍も背景も異なる人々と寝食を共にし、衝突し、対話を続けるプロセスその

ものが、私が理想とする「構造的暴力を乗り越えるための教育機関」の最小単位であると感じている。私の使命は、政治学と人類学の知見を融合させ、構造的暴力を分析する力を養うこと、そして博士号を取得した後に、日本や世界に小規模な対話型の教育機関を設立することだ。それは国境という物理的な壁を越えるだけでなく、私たちの心の中に潜む境界線を、言葉によって解体していくための拠点となる。平和とは、波一つない静かな海の状態ではない。それは、絶えず押し寄せる構造的暴力の波を、対話という舵で乗り越え続けるプロセスそのものである。ピースボートという船は国境を越えていくが、真に越えなければならないのは、私たちの意識の中に深く根ざした境界線である。それが、未来の国際社会に対して私が果たせる唯一の責任だと信じている。